

タイトル	『祖国の砂 日本無名詩集』を跡付ける 第二回
著者	石井, 耕; ISHII, Kou
引用	北海学園大学学園論集(178): 31-63
発行日	2019-03-25

『祖国の砂 日本無名詩集』を跡付ける 第二回

石 井 耕

2 詩人たち

『祖国の砂』の74人の詩人たちを、本稿では14のグループに分けてみた。グループに分けたのは、わかりやすくしたいためである。このグループ分けは、明確な区分ではなく、他のグループに含めたほうがふさわしいという場合もある。例えば、北本哲三は農民グループにしたが、地域リーダーグループといったほうがよいかもしれない。大場康二郎は、出版時には東京在住だったが、経緯から九州のグループに入れた。

グループの範囲も、様々である。北海道・九州といった地域で分けた場合もあれば、農民・工場労働者といった産業・職業で分けた場合もある。久保田俊夫や大場豊吉は、工場労働者であり、伊藤習司などとともに北海道室蘭のサークル仲間である。本稿では北海道グループとした。加能徹と石田良雄は、教員グループとして、重要な間柄である。井上光晴と谷川雁についても、いうまでもない。大場康二郎も含めて出発点の九州グループとしている。

ようするに、年齢順や掲載順といった紹介よりは、グループごとに記述したほうが、わかりやすいということである。

その上で、それぞれ一人一人について、特徴のわかるエピソードを、収集した情報をもとに挙げてみた。もちろん、それぞれの人びとについて、すべてのことが示しているわけではない。ごく一部の特徴のわかるエピソードについて示したのである。詩人ではなく、掲載詩についてのエピソードを取り上げた場合もある。

特徴のわかるエピソードによって、『祖国の砂』の出版された1952年前後の時代を、人びとがどのように生きていたかを描く試みが、本稿なのである。グループ分けはしてみたものの、一人一人の生き方は個性的であり、類型的・標準的ではない。活気と混沌に満ちた時代に、多様で魅力的な生き方をしていたのである。

A 地域リーダー

地域リーダーとして、松永浩介（＊中央委員）、山田今次（＊会計監査）＋、清水清＃＋、押切

順三#+, 吉田美千雄(*中央委員)#+, ふじの・きくはる(*中央委員), 塚本雄作(*中央委員), えのき・たかし#+, 吉田欣一(*中央委員)+, 錦米次郎#+, 内田豊清, 酒井眞右の12人を対象とした。各地域において、詩誌発行のサークルで、リーダーとしての役割を果たした人びとである。

なお、*は、新日本文学会の1952年4月1日現在役員(中央委員, 会計監査)の6人である。今回の対象者で、当時中央委員であったのは、他に井上光晴(佐世保)がいる。

#は、竹内(2009), 鳥羽(2011)が挙げた「目立った」詩人14人に含まれる7人である。(他の7人は、井上光晴, 谷川雁, 石垣りん, 山崎正和, 安藤美紀夫, 千早耿一郎, 且原純夫である)

+は、1次・2次『コスモス』の同人の7人である。

いずれにも当てはまらないのは、内田豊清と酒井眞右の2人である。

地域リーダーの人びとには、戦前逮捕された経験を持つ者もいる。また、多くは兵役の経験を持ち、兵士として海外に派遣された経験を持つ。さらには、戦後定員法, レッド・パージによって、解雇された経験を持つ者も多い。すなわち、戦中から戦後へと、時代の大波に遭い、それを潜り抜ける経験をしてきた人びとである。

A-1 松永浩介「かしめ鋏」「希い」(掲載詩, 以下同じ)

前述した松永浩介の作者紹介は次の通りである。「本名若井泉, 横浜市 1907年9月7日新潟県生れ 45歳 小学校卒。大工。『鳩』『鍛冶屋』」

『祖国の砂』掲載詩人の最年長である。当時新日本文学会中央委員であり、幅広く全国の多くの詩人たちと交流のあった人物である。もう少し詳しく略歴を書くと「1917年横浜に転住, 小卒後工場に働き, 大震災から大工となる。ナップに参加, 『詩精神』『芸術クラブ』『詩人』等に詩を発表した。太平洋戦争に6年間南方に従軍。新日本文学会会員。」である。

なお、『鳩』は松永浩介の主宰していた詩誌で, 山田今次, 千原久仁子, 浜田矯太郎などが参加していた。1951年1月創刊で秋山清も名を連ねていた。

松永ら4人だけが、『祖国の砂』と『京浜の虹』の両方に、詩が掲載されている。前述したように、松永浩介は、『京浜の虹』にはサークル誌(『鳩』や『鍛冶屋』)を提供しただけと述べている。当時『鳩』は、京浜における重要な文化サークルであった。

戦前の活動については、松永は『私のリアリズム―自伝風に―』(同刊行会, 1991年, 初出は『コスモス』)において回想している。

山田今次は、この本の前書きで、松永浩介について、次のように書いている。「今、ふと思うのに、松永君やばくらの文学的世代は、大まかにいって、ものを客観するということの中に真実を見ようとする、リアリズムの時代であったといってよい。」「松永君の信条としてのリアリズムは、その弊に落ちこむことの理を避けて、着実な生活のリアリズムを、現場の生活者としてとらえることに、あったにちがいない。」面白いのは次の話である。「松永君の口癖に〈俺は大工(でえく)

だ」というせりふがある。これがはじまると話はつきそうにない。皆皆これを〈大工（だいく）シンフォニー〉とってあきらめる。」

松永の掲載詩の「かしめ鉚」の一節である。この詩は『京浜の虹』にも掲載されている。

「そのかしめ鉚の一本になることを。運ばれていった造船所は活気であふれていたが、設備はまだ充分ではなかった。

鉄板にのせられるがはやいか、スーッと尻の方から赤まってくる。つめたい空気の中を弧を描いて、むぞうさにブリキのミットで受けとられ、すぐさま穴にさしこまれる。と猛烈なニューマチックの乱打だ。歯をくいしばっているうちにいつしかおれは気を失ってしまった。」

『私のリアリズム』によれば、戦前から松永浩介は、プロレタリア文学運動に参加してきた一人である。ここで、松永が『詩精神』に発表した「船底修理」について、岡本潤が『詩行動』1935年4月で「小主観を抑えて「生活」を前面に押し出しながら、その中に社会的感情（リズム）を波打たせてゐる詩として、此の詩は可成高く評価されていいものだと思う」としたことを紹介している。松永は、戦前のプロレタリア文学運動で何回も検挙されている。

次いで、召集を受けた松永の6年間の戦争体験については、『月刊社会党』（327号、1983年8月）に「ニューギニア敗走記」を書いている。松永浩介は大工であり、軍隊では建築隊に所属していた。「建築中隊で最大の犠牲は1944年4月16日、ニューギニアへの転進が果たせず、アンボンに集結するべく航行中、オビ島沖で帰島を目前にして魚雷攻撃を受けて沈没、91名の戦死者を出した。マカサルからジャワのマランに後退する時に空襲で掃海艇が沈没、その時の戦死者40名。511名編成の中隊で戦死者156名。平均年齢33.4歳である」と書いている。1946年、抑留地ジャワのガララン島より復員した。

戦後、『勤労者詩選集』（新日本文学会 壺井繁治編、1948年）には「船底修理」が掲載されており、その所属は「京浜労働文化同盟」となっている。『船底修理』は、1953年12月、鮎沢書店から出版された詩集の表題ともなっている。

この他に、『詩集トッカンカユ』（1962年1月、横浜詩人会ネプチューン・シリーズ刊行会）、『詩集望郷（於ガララン島）』（1976年、自家版）、『一兵士の戦中通信』（1978年、オリジン出版センター）などが刊行されている。

もう一つの掲載詩の「希い」は『鳩』9号が初出であり、『新日本文学』の1952年5月号に掲載されている。前述したように、この時点では、『祖国の砂』に掲載されることがすでに決まっていたと考えられる。

その後、1964年新日本文学会脱会。1965年3次『コスモス』に参加している。3次『コスモス』については、えのき・たかし（A-8）、吉田欣一（A-9）の項参照。

また、松永浩介は、小熊秀雄の研究者でもあり、筑摩書房版、思潮社版では、伏字の復原に、松永の所蔵本が参照されている。再掲になるが、実は筑摩書房版の『小熊秀雄詩集』(1953年)について、松永浩介からの1953年3月19日付け石井立宛ての手紙が遺されている。石井立は『小熊秀雄詩集』の編集者でもあった。(この書簡は、世田谷文学館に寄贈)

「「小熊秀雄詩」ありがとうございました。これだけ集めるには苦勞された事でしょう。立派な出来栄で嬉しく思います。(中略)新しく詩を書き始めている若い人達にきっとプラスをもたらすことでしょう。彼の全作品が改めて読み直せるのがこれからのたのしみです。編集後記をみて「漏れがあった」部分を調べてみたら、壺井(繁治)氏の写しに不備があったらしく思えるので気付いた点をお知らせします。」として、「ゴー(オ)ルドラッシュ」「詩からの逃亡者に与ふ」「接吻」について、伏字を起すなどの指摘がされている。

伏字を起すことが可能だったのは、『私のリアリズム』によれば、次の事情による。「(小熊から)「実は詩集が質屋にはいっているのもう一ヶ月程待ってほしい、そのかわりに伏字を全部埋めてあげます。」ということで、伏字の起こされた小熊秀雄の詩集『小熊秀雄詩集』と『飛ぶ櫓』を持っていたからであった。」「二冊の詩集は家内が持ち廻ってくれたお蔭で焼け残り、現在手元にある。」「戦後刊行された「筑摩書房版」の「小熊秀雄詩集」も「思潮社版」の「小熊秀雄全詩集」も私の持っている、著者が起してくれた伏字が用いられているのである。」

収集した詩誌や詩稿、詩作ノートなど6240点が、1985年に神奈川近代文学館に寄贈され、「松永浩介資料」として、収蔵されている。

また、松永は、1992年の第2回横浜文学賞を受賞している。

1996年1月21日逝去された。享年89歳であった。

A-2 山田今次「ねむり」「貨車」

作者紹介は次の通りである。「横浜市 1912年10月20日生れ 39歳 神奈川県立商工実習学校機械科卒。地方公務員。『新日本文学』『鳩』」

1952年当時、新日本文学会会計監査(常任中央委員の経験もある)である。『新日本文学』の常連執筆者である。1952年5月号に「貨車」(『祖国の砂』掲載詩、既に掲載決定。『鳩』9号が初出)、1953年1月号に「おめでとう」が発表されている。

前述のように『鳩』は松永浩介の発行していた詩誌である。山田今次は『コスモス』にも、18号(1957年5月)、19号(1957年9月)に、詩を発表している。

『山田今次全詩集』の「年譜」から引用する。

1935年 長谷川製作所(鶴見)に就職。部品の設計製図、現場でのスケッチなどの仕事。

1940年 ヤマト工作所に転職。地質探査等のボーリング機械を製作。

1941年 内藤製作所に転職。

1942年 検挙。不起訴。復職。

- 1946 年 京浜労働文化同盟結成（36 労働組合の文化部が基盤）副幹事長となる（幹事長岩藤雪夫）。
- 1947 年 横浜市長 石河京市に請われ文化関係の嘱託となる（戦前無産党の頃面識あり）。
- 1948 年 『勤労者文学』編集委員となる。
- 1949 年 横浜市従業員労働組合執行委員教宣部長。新日本文学会常任中央委員。
レッド・パージ「無党派のばくも捲き込まれて戩首の通告を受ける。法廷にて争うこととなり名目の代表となる」。
- 1951 年 レッド・パージ、横浜市当局と一部和解、復職する。
- 1952 年 『京浜の虹』に「京浜労働者の歌」、『祖国の砂』に「ねむり」、「貨車」を収録。
- 1963 年 支援していた飛鳥田一雄横浜市長となる。
- 1964 年 市民美術団体の要望を受け「横浜市民ギャラリー」開設、館長となる（－1978 年）。
山田今次の代表作は「あめ」である。1948 年の新日本文学会の第三回創作コンクールで当選し、『勤労者文学』創刊号に発表された作品である。漢字を一つもつかけておらず、ほとんどオノマトペ（擬音）でできている。
掲載詩の「貨車」も、擬音が多い。

「ずでってん てってん…
ずでってん てってん…
ずでってん てってん…
ずでってん てってん…
たったんぐ…たったんぐ…」

詩集としては、1958 年 2 月『行く手：詩集』（コスモス社）、1969 年 12 月『でっかい地図：山田今次詩集』（昭森社）、1999 年 9 月『山田今次全詩集』（思潮社）が出版されている。

1988 年第 37 回「横浜市文化賞（芸術部門）」を受賞している。

1998 年逝去された。享年 86 歳であった。

A-3 清水清「燈台」「さくら」

作者紹介は次の通りである。「東京都 1917 年 4 月 5 日浅草生れ 35 歳 ジャーナリスト。」
ジャーナリストとなっており、読売新聞社員である。学歴については「特に記す程なし」となっている。新日本文学会には未加入であった。『詩行動』『コスモス』同人であり、掲載詩の「燈台」も初出は『コスモス』である。

1989 年逝去された。享年 72 歳であった。

清水清『写実への道—その詩と批評』および『回想清水清』に基づいて、簡単に清水清の略歴

を紹介しよう。なお、前者の「清水清作品目録」には、『祖国の砂』に掲載されたことが明記されている。

まず、『詩行動』であるが、清水を編集発行人として、1935年3月の創刊号から1935年10月の7号までが発行された。清水18歳-19歳である。そして、終刊を迎えたのは、35年11月に、無政府共産党事件によって、逮捕されたからである。「未成年のため起訴留保で釈放となるが誓約書を書かされる。」この時、植村諦など『詩行動』の主要同人の多くは検挙された。

1937年、投稿文芸誌第一次(1937年)第二次(1938年)『新樹』を創刊した。戦後も1949年に文芸誌『新樹』を創刊している。

また、1971年から、4次『コスモス』(通巻40号)の編集を引き継いでいる。編集人は清水清、村松武司、西杉夫であった。1977年の通巻57号まで編集発行人を務めた。1972年の定年退職直前から編集を引き受けたのである。

兵役では、1943年、26歳のときに、海軍主計科の補充兵として召集された。台湾の新竹で終戦を迎え、1946年2月台湾より復員した。

1953年、36歳のときに、結核に罹り、長期療養を余儀なくされる。1956年病癒え、復職した。

一方、仕事では、1937年、帝都日々新聞社に、詩人岡本潤の代理として入社し、整理および演芸記者を担当した。この整理の仕事が、その後も新聞社でのメインの仕事になっていった。1940年読売新聞社に入社し、通信部整理課勤務となった。

復員し、1947年読売新聞社に復職し、地方部勤務となった。1953年長期療養で、整理部次長を解かれ、休職し、編集部勤務扱いとなった。1956年復職し、特信部勤務となった。1965年読売新聞朝刊(毎週一回)、[日本を考える]〈家族・風俗・レジャー・教育〉シリーズを企画編集する。1966年読売新聞社編・発行で『教育を考える』を発刊する。同年読売新聞夕刊(毎週一回)[われら20代]を企画編集する。1967年読売新聞社編・雪華社刊『われら20代』を発刊する。1972年、55歳編集部参与で定年退職する。

読売新聞社の同僚であった浅野恭平(元整理部長)が、清水清の仕事ぶりについて回想している。「新聞社の『整理』という仕事は、大事な仕事です。取材記者のニュース原稿を全部受け取って、その採否と扱いの大小を決め、見出しを付け、レイアウトを考え、紙面を作り上げます。つまり具体的な編集作業そのものを受け持つわけです。」「清水さんは、この難しい整理記者の中で、第一級のベテランでした。特に地方版の整理に縦横に腕を振るわれました。」「やがて、清水さんは、全国版の整理部に次長として転じて来られました。私はその日から助手の一部員として清水先輩の仕事を手伝うことになりました。いちばん驚いたのは見出しのうまさです。詩人として長いキャリアを持っているということを後で知り、そのせいかと思った記憶があります。」

読売新聞社社友の野田康男も、清水の仕事をつりかえる。「「おい、康さん、さがれ、オレがやる！」清水は大声をあげると、大組み(紙面のレイアウト)をしている私の横に立った。締切時間を過ぎて飛び込んできた大きな列車事故。極めて短時間のうちに紙面を作り変えなければなら

なかった。その作業は私の手には負えなかった。手際よく仕事を進めなければ、新聞輸送列車に間に合わない。」清水は工場の植字課員をせき立てながら、迅速、的確に大組みを進めた。それを呆然と眺めていた私には、魔法のように思えた。ひと仕事終えて、たばこを啜っていた清水が、巨岩のように大きく映った。」

清水の交友関係は、多くの詩人たちとの長い関係をうかがわせる。無政府共産党事件でともに逮捕された植村諦については、『日本未来派』89（1959年9月1日）に、植村諦追悼で、「二枚続きのハガキ」を書いている。他にも岡本潤、関根弘そして秋山清など多くの詩人たちとの長い交際があった。特に秋山清と清水清は、清水の10代からの付き合いであった。そして、戦後秋山の主宰した『コスモス』同人となったのである。

木原実（木暮真人）とも長い交友関係があった。1933年、清水16歳のときに、愛媛より上京してきた木原と初めて会った。その後無政府共産党事件で二人とも拘束される。1940年、木原は再び上京し、清水の住んでいた曙アパートに住んだ。そして、戦後、両者とも『コスモス』同人となったのである。兵役経験を持つ二人は「戦争中の詩を集めて共同の詩集を出そうと計画した。」これは実現しなかったが、1975年清水は戦中から戦後の詩を収めた『重い彼方』（コスモス社）を発刊した。また、木原実全詩集によせて「有情な心象の風景」を書いている。

A-4 押切順三「おみなえし」「山上部落」

作者紹介は次の通りである。「秋田市 1918年10月27日雄勝町生れ 33歳 農業協同組合連合会員。『処女地帯』」

秋田県立横手中学校卒業後、東京の産業組合中央会附属産業組合学校を卒業した。秋田農業会を経て、農村医療の業務に携わった。「1950年の秋ころ、私は、農業協同組合が発足したばかりの北秋田郡内の農協を回って県連合会への協力を懇請する役目で、村々をくまなく歩きに歩いていた。」

『読本「押切順三」』の年譜（品川清美編）によれば、農協の中でも特に厚生連関係の仕事をてがけ、秋田県厚生農業協同組合連合会本部・企画課長（後医務部長、広報部長など）、秋田県厚生農業協同組合連合会雄勝病院事務長、同秋田組合総合病院事務長などを歴任した。

押切順三は、第二次『処女地帯』を、戦後1950年北本哲三とともに発行し、以後その北方自由詩人集団を牽引した。高橋兼吉や草階俊雄も初期の執筆者であった。『処女地帯』、北方自由詩人集団は、秋田における有力な文学サークルであった。もっと言えば全国でも有数の文学サークルであった。1974年まで60号を刊行している。

押切は、『コスモス』同人でもあり、2次『コスモス』では、1950年1月の14号から、1957年9月の19号まで6篇の詩を発表し、4次『コスモス』100号までで、詩69篇、随筆、評論など18篇を発表している。

『新日本文学』には、1952年4月号に「乾いたてのひらを」、1953年1月号に「稗ぬき」（初出

は『処女地帯』13号)を発表している。『読本「押切順三」』年譜には、『祖国の砂』に「おみなえし」「山上部落」が収録されたことが明記されている。

掲載詩の「山上部落」は押切の中国山西省での従軍の経験をもとに書かれている。「二度目の召集で、陸軍二等兵としての兵隊ぐらし」だった。

「ふたつの国の兵隊が
かけのぼっては死に
かけおりては死に
なもしれぬ雑草に埋れた」

この詩は、『処女地帯』の創刊号(1950年5月)が初出である。押切は、「この詩ができあがったので、処女地帯創刊の踏ん切りがついたとも言える」としている。『祖国の砂』などに「拾われて、いつしか私の代表作となった。」秋山清は『押切順三全詩集』の解説で、「『祖国の砂』を代表する力作だと私は今も思っている。」としている。

もう一つの掲載詩の「おみなえし」の初出は、『人間』1951年6月号(目黒書房発行)で、秋山清の採択であった。

押切の詩集としては、『大監獄』(1963年)、『斜坑』(1968年)、『沈丁花』(1971年)、『祝婚歌』(1974年)を刊行し、『押切順三全詩集』(1977年、たいまつ社)に、それまでの詩を収録した。この詩集で、第21回農民文学賞(1978年度)および秋田県芸術選奨(1978年)を受賞した。

1999年7月3日逝去された。享年80歳であった。

A-5 吉田美千雄「港湾点描」「天と地と」

作者紹介は次の通りである。「北海道室蘭市 1918年1月24日生れ 34歳 室蘭中学校卒。電気工夫、配電会社設計係等を経て、敗戦後電産室蘭分会書記長、執行委員長となる。1950年8月、不当誡首(レッドパージ)された。現在、室蘭文化サークル協議会事務局勤務。『新日本文学』中央委員、『葦会列島』同人、『詩と詩人』同人、『コスモス』同人、『浪漫群盗』同人、『北方詩人』同人。」

1949年詩誌『とらんすぽおたあ』が室蘭で創刊された(トランスポーターは、港湾で使用する大型の石炭運搬機のことである)。編集発行人は吉田美千雄であり、発行所は新日本文学会室蘭支部である。同年、吉田は、第一詩集『神の留守』(帯広北海文学社)も刊行したらしい。その後も、ほぼ同じメンバーで短命の詩誌、文芸誌を次々と発行しては廃刊することを繰り返している。このメンバーが、伊藤習司(J-1)、大場豊吉(J-2)、久保田俊夫(J-3)の項で後述するが、室蘭の新日本文学会の構成メンバーであり、1954年の日本製鋼所室蘭製作所争議に関わっていくのである。彼らは、この期間一つのサークルを構成していたと見ることができる。

吉田は、1952年当時、新日本文学会中央委員である。また、創刊当初の『列島』の地方委員である。『列島』には詩も多く発表しており、6号（1953年10月）では、出海溪也との往復書簡「水害の九州と基地の北海道」が掲載されている。前述したように、『コスモス』同人でもあり、1950年の14号から17号に4編の詩を発表している。吉田は、この室蘭の文学サークルの中で、全国誌への結節点となっていたようである。

さらに、吉田は『詩集 八月十五日（浪漫群盗叢書）』（文芸旬報社、1952年）、『壺・間もなく終点』（夜汽車文学会、1956年12月）を刊行している。『八月十五日』の一部が、「終章」という題で、『新日本文学』1952年8月号に掲載されている。『壺・間もなく終点』には、掲載詩の「港湾点描」「天と地と」が収録されている。

『壺・間もなく終点』の序文は『列島』の最初の編集人・井手則雄が書いている。「彼（吉田）が重工業都市室蘭に住み、そこに働く仲間たちに支えられていることにあると知ったのは、この夏吉田の病気を見舞いに行った時だ。彼は咯血のあとの青白い顔の中に、溶鉱炉の火をともしたような明るさをもっていたのである。その仲間の画家や働きながら文学している友らもまた、日本の健康な青春を象徴したように陽気だった。」

吉田の「あとがき」では「近く湖畔の療養所に入る」「大場豊吉、金丸義昭、三浦進の三君に感謝を捧げる」となっている。

『壺・間もなく終点』を刊行した夜汽車文学会では、雑誌『夜汽車』を発行していた。1954年11月15日発行の第2号は編集発行人吉田美千雄である。1955年7月発行の第3号は、編集人吉田美千雄、発行人金丸義昭である。1956年発行の第5号では、新日本文学会室蘭支部と夜汽車文学会が連名となっている。1958年1月の第6号以降は、編集人大場豊吉、発行人金丸義昭となっている。吉田美千雄は、同人であり続けたが、病のため編集業務からは退いたようだ。

また、『松川詩集』（宝文館、1954年5月）に「火の車の生活のなかから」を発表している（これは『新日本文学』にも再掲）。

その後は、「1964年」「北海道詩人会議」会員となる。1967年「北海道文学案内」を創刊して、編集発行したが、その後病気のためいっさいの文学関係の団体や同人誌との関係を断っている。」

A-6 ふじの・きくはる（藤野菊治）「除夜に」

作者紹介は次の通りである。「山口市 1908年9月12日生れ 43歳 中卒。元朝日新聞西部本社編集局、山口支局勤務。1950年7月退社。現在「九州産業経済新聞」新聞記者。『新日本文学』、『萩文学』（『新日本文学』萩支部）、『海燕』」

藤野菊治は、1952年当時新日本文学会中央委員である。『新日本文学』1951年3月号に「山口から一果報者増山太助氏へー」という文章を発表している。人民文学への批判である。藤野、塚本、吉田欣一など地域リーダーのくびとは、人民文学に対して、かなり厳しい批判・反論を繰り返している。

また、『新日本文学』1951年8月号に「緑の包装はよびかける一王と楊と黄と張に捧げるうた一」を発表している。初出は『山口文学新聞』である。1952年12月号に「私もまた十月の空を愛する」を発表している。

さらに広島県の『われらの詩』12号(1951年9月20日)に「人混みの汽車の中で」を発表している。

A-7 塚本雄作(鎌倉常三)「高原」

作者紹介は次の通りである。「静岡県島田市 1914年4月1日生れ 38歳 小学校卒。1938年、静岡県下人民戦線運動に加わり検挙される。1949年まで電気、瓦斯溶接工として鶴見造船、日本軽金属等、15年間の工場生活。1949年、不当解雇。現在開拓地農業協同組合経営工場主任。『新日本文学』『東海作家』」

さらに「1934年まで、コップ及びナップの地方サークル組織。」「戦後、全日本化学労働組合静岡支部書記長等労組運動に専心。」不当解雇については「1949年の第1回レッド・パージにより、工場を追われ、現在に至る。」と書かれている。

1952年当時、新日本文学会中央委員である。本名の鎌倉常三で『新日本文学』1946年4月号に「労働者階級から」を書いている。

以下は塚本雄作名義で『新日本文学』1951年3月号に「課題は何か―「新日本文学」と「人民文学」の問題」を書いており、人民文学への厳しい批判となっている。また、1951年8月号に「静岡県の啄木祭を終えて」、1951年9月号に「文学新聞」定期刊行をたたかいとれ」を書いている。

また、『新日本文学』1953年5月号に「現代知性の系譜―「極光のかげに」と「シベリヤ物語」」を発表している。1956年5月号では「芥川賞一、二のこと」を書いている。

そして『「静かなる山々」の諸問題』(1954年3月、新日本文学会静岡県支部協議会)を出版している。

後日『静岡県近代史研究』第5号(1981年5月)に「静岡県近代文芸運動史考」を発表している。また、『労働者文学その側面：佐多稲子と「驢馬」の周辺』(労働者文学会議、オリジン出版センター発売、1987年5月)を出版している。

A-8 えのき・たかし(伊與田正敏)「祖国」

作者紹介は次の通りである。「豊橋市 1921年1月30日豊橋市生れ 31歳 通信講習所卒。通信省に勤務し、全通地区本部文化部長。1949年8月、定員法により不当減首。現在古書籍商。新日本文学支部所属。『東海作家』『冬の日』『若潮』『口笛』」

この詩集のタイトルにもなった「祖国」を書いたのは、えのき・たかしである。『海燕』第1号が初出である。

「指のあいだから
サラサラと こぼれおちる砂が
祖国の砂です」

えのき・たかしの『老狙撃兵』および『えのきたかし追想』によって、詩人について、簡単にまとめておきたい。そこでは「祖国」が『祖国の砂』に収録されたことが明記されている。「祖国」は1950年7月3日の作である。また、秋山清が「えのき・たかしとコスモスと私」という一文を寄せている。『祖国の砂』というタイトルが、えのき・たかしの「祖国」から思いついたものであることが記されている。

略歴をまとめると、通信省勤務とは、具体的には1938年から豊橋郵便局郵便課に勤務していたのである。

兵役・軍属としては、次の通りである。「1941年、教育召集を受け、福井県鯖江歩兵第36聯隊に入隊。銃剣術に励み、肋膜炎のため一時療養。3か月後除隊。」「1943年3月、軍属（野戦郵便局要員）として志願従軍。4月、軍事教練のため半月間北京滞在。主に山西省太原第85野戦郵便局に勤務。」「1944年6月、米軍の爆撃を受け郵便局全壊。全身に破片を受け負傷。」「1946年3月、25歳で内地帰還。豊橋郵便局保険課に勤務。」山西省ということは、押切順三と同様である。

労働組合活動としては、次の通りである。「1947年2月、2・1スト当時、全通労組豊橋支部執行委員青年部長。」「1948年3月、全通スト当時、全通労組愛知地区本部文化部長。」「1949年8月、28歳で定員法により戕首。」「1951年、日本共産党離党。」

えのきは、大日本帝国軍隊、通信省（郵便局）および全通、日本共産党と、わずか数年の間に、所属した組織から、次々と切り離されたのである。

戕首後、えのきは1950年に豊橋市大福マーケット内にて古書籍商冬日書房を開業した。以降家業とする。『追想』に寄稿した方々の多くは、豊橋周辺の同業の古書籍商組合関係者である。

1949年新日本文学会豊橋支部を結成している。えのきは、古書籍商開業後、かたわら多くの文学活動を行い、詩を書き溜めていた。まず、1952年9月勤労者サークル詩誌『白塔』を創刊している（1958年37号まで）。

『文学評論』（季刊、理論社）1954年11月号に「文学サークル再検討について」、同1955年6月号に「壁について—文学サークル抄論」、同1956年4月号に「農民文学の道程について—伊藤永之介論」を書いている。また、2次『コスモス』19号（1957年9月）に「杭—不毛地帯8—」「金城湯池」を発表している。

さらに、1963年2月、3次『コスモス』に第2号より参加している。3次の同人は、秋山清、伊藤正斎（瀬戸市）、河合俊郎（渥美町）、錦米次郎（松阪市）、吉田欣一（岐阜市）であり、東海地区で発行されていたのである。ここに、えのき・たかしは老狙撃兵連作を掲載していた。そして、第5号から第8号まで『コスモス』の編集を担当した。

えのき・たかしは、1970年7月24日、交通事故のため、逝去された。享年49歳であった。初孫が生まれた直後であったという。

A-9 吉田欣一「語らねばならぬ」

作者紹介は次の通りである。「岐阜市 1915年11月26日生れ 36歳 高等小学校卒。塗装工。『新日本文学』『東海作家』『岐阜文学』『らんぷ』」さらに詳しくは「1936年頃窪川鶴次郎、箕清、田中英士らと『新文学』に拠る。1942年頃、小野十三郎、田木繁、杉山平一郎らと『大阪文学』に拠る。戦後新日本文学会岐阜支部設立現在に至る。新日本文学会中央委員。詩集『歩調』あり。」となっている。

掲載詩の「語らねばならぬ」は『東海新文学』（1949年）初出である。また、「杵」を『コスモス』2-1（1947年5月）に発表している。

東海地区で発行されていた3次『コスモス』の編集を、えのき・たかしから引き継いだのが、吉田欣一である。第9号（1965年6月）からである。3次の最終号である第20号（1969年9月）まで編集を担当した。

吉田欣一は、数多くの詩や文章を多方面に発表している。『新日本文学』の常連執筆者でもある。さらに、以下の通り詩集の出版も8冊を数える。

『歩調』（1951年）新日本文学会岐阜支部

『レールの歌 ほくの松川詩集』（1959年）新日本文学会岐阜支部

『吉田欣一詩集』（1965年）コスモス社

『ベトナムに平和を！』（1968年）岐阜市民連合

『わが射程』（1975年）幻野工房

『わが別離』（1981年）幻野の会

『日の断面』（1990年）企画出版

『日本現代詩文庫 吉田欣一詩集』（1993年）土曜美術社

なお、『幻野』は、1971年から吉田欣一が主宰していた文学誌である。

ここでは、『えのき・たかし追想』（1971年）に掲載された吉田欣一「追憶四点」から一部を引用する。地域リーダーの立場が明確に書かれている。

「日本共産党の50年問題と云う内部抗争に端を発し、私達多くの文学に関係していた共産党員はその頃、新日本文学会員として、新日本文学会を守るか、人民文学に加入するかと云う岐路に立たされていた。新日本文学会を守ると云う事は日本共産党から除名される事を意味していた。多くの文学する人達の政治と文学に就いての関係が具体的な問題として目前にお前はとうとう云う形でつきつけられたわけである。

それらの事が政治と文学と云うことではなくて、政党の文学と云う次元で、文学はどちらかと云うと片隅に押しやられ、政党内部の抗争が主導権を持っていたように思われる。宮本百合子が

階級敵のように人民文学の人々から罵倒される有様では、そこに文学は不在であったと回顧される。私は新日本文学会を守る決意をし、宮本百合子を階級敵と呼ぶ人々と争う立場に立ち、日本共産党からは除名された。その頃、私達は新日本文学会を組織的に破壊しようとする人達に抗して、新日本文学会東海地方会議を持つ事となり、豊橋のえのきたかし、静岡の塚本雄作、岐阜では吉田欣一などが活動を開始した。」

1951年7月1日、えのき・たかしが豊橋に会場を探して、この新日本文学会東海地方会議が持たれたのである。

秋山清の「人民詩精神」では、3次『コスモス』の主力、東海地区の詩人たちについて「日共の1950年問題の苦い経験のなかから不従属の精神を強固に持して来た者たち」と評している。

A-10 錦米次郎「花岡供米事件」

作者紹介は次の通りである。「三重県松坂市 1914年6月28日生れ 38歳 高等小学校卒。小売員（京都西陣帯地商）、土工、事務員等を経て、兵隊にとられたが、現在、乳牛二頭を持つ自作農。『コスモス』『詩と詩人』『三重詩人』編集」

兵役としては、1934年、伏見騎兵二十連隊に入営し、2年後に除隊した。1937年に召集を受け、中日戦争に従軍し、1939年9月に召集解除された。1944年6月にまた召集され、ベトナムに派遣され、そこで終戦を迎え、1946年4月に復員した。

中野重治は「錦という人は、私には第一に百姓である。農民といっても無論いいが、農民は農民でも古い百姓という言葉があてはまるような人間である」と評している。（詩集『百姓の死』（1962年版）序によせて）

錦米次郎は、『コスモス』同人であり、第1巻3号（1946年9月）から19号（1957年9月号）まで、10篇の詩を発表している。えのき・たかし、吉田欣一の項（A-9）で述べたように、東海地区で発行された3次『コスモス』の同人でもあった。

『百姓の死』（1977年版）では、「『コスモス』の創刊号を焦土の津の書店でみつけた。私が焼跡のこの街で『コスモス』をみつけず後日編集者の秋山清に出会わなかったならば戦後の私は田園の片々たる抒情詩人に終ただろうとおもう」と書いている。

また、『新日本文学』でも常連執筆者であり続け、多数の作品を発表している。

『三重詩人』は、1950年に創刊され、錦が編集を行い、第8号まで刊行した。のちに第二次『三重詩人』を創刊している。また、吉田欣一の『幻野』にも参加している。こちらでは、主に小説を書いている。

掲載詩の「花岡供米事件」は、公判を傍聴し、書かれたものである。

詩集としては、『日録』（1947年）、『旅宿帳』（1949年）、『百姓の死』（1962年、中日詩人賞受賞）、『錦米次郎全詩集』（1998年、第42回農民文学特別賞受賞）などを刊行している。詩集と同題の『百姓の死』（1977年6月、風媒社）もある。

2000年2月12日逝去された。享年85歳であった。

A-11 内田豊清「生きている穴」

作者紹介は次の通りである。「神戸市 1914年4月21日神戸生れ 38歳 農林省神戸生糸検査所雇員・神戸生糸問屋業組合書記・区役所雇員を経て現在謄写印刷及び筆耕。『詩と詩人』(同人),『鏑』(編集人,1950-56年 鏑同盟編 鏑同盟詩社発行)。」

「今日から見れば、学歴という程の特筆すべきものはありません。略歴は全ていずれも過去のもの、興味ありません。」という注釈がついている。

後述『動く密室』によれば、「主として戦後より、航海表、鏑、詩と詩人、現代詩の会、前衛詩人協会、日本未来派等を経て現在詩人会議会員。1951年『詩学』に詩学審査委員会(壺井繁治選)より新人に推薦される。1954年『三田文学』新進詩人コンクール(西脇順三郎、村野四郎、佐藤朔選)に入る。1960年ブラジルの詩人L.C. ヴィニョーレスよりブラジルに紹介される。1962年文化雑誌『半どん・18号』(現代・芸術・人と作品)に現代社グループより推薦される。そのほか鏑同盟詩集(アンソロジー)。鏑詩画集を刊行する。」と書かれている。

『新日本文学』1951年8月号に、「雲」* (初出は『鏑』7号)を発表し、1952年8月号に、「八・一五記念に」を発表している。

1954年5月『松川詩集』(松川詩集刊行会編)が刊行されているが、この中に内田豊清の詩「曇ったレール」*も収載されている(1953年12月22日、松川事件控訴審判決の日という注釈がある)。

『現代詩』1-1(1954年7月1日)に、「水の中のズボン」*を発表している。同1-5(1954年12月1日)に「平和のあかし」、4-3(1957年3月1日)に「ツル」、7-8(1960年8月1日)に、童謡「生きている武蔵と小次郎」が掲載されている。『現代詩』は、創刊1954年7月—終刊1964年10月である。当初、新日本文学会の機関誌として発行されたが、1958年7月号より、「現代詩の会」編集となった。第一回の運営委員には、且原純夫も加わっている。

また、大阪の詩誌『詩と真実』11(1955年4月20日)に、「死の雨」を発表している。『詩と真実』は、創刊1952年11月—終刊1955年4月である。発起人には、柏岡浅治も加わっている。

さらに、『日本未来派』84(1958年10月25日)に「四ツ角」「花火」、85(1958年12月30日)に「今日」、87(1959年4月25日)に「黒いベル」、91(1960年1月1日)に「海」、92(1960年3月5日)に「ルパン島」*, 98(1961年4月20日)に「生きている森」*, 100(1961年10月20日)に「ザラザラの樹」*, 102(1962年4月30日)に「終ることがない」、103(1962年8月15日)に「青い風邪」、105(1963年4月10日)に「わからない手」、106(1963年7月30日)に「寝棺」、110(1964年5月30日)に「梢にのこっている柿」「おり鶴」、117(1965年12月25日)に「蟬のカラ」、119(1966年5月10日)に「背後のものへ」*と、着実に発表し続けている。『日本未来派』は、1947年6月に創刊され、2007年時点でも継続している。

詩集としては、『動く密室：内田豊清詩集』(1977年6月、高田屋書店(神戸))を出版している。

なお、上記の＊は『動く密室』に収録されている詩である。この詩集は三部構成となっており、Ⅰ（1966－1976年）、Ⅱ（1958－1965年）、Ⅲ（1950－1954年）である。掲載詩の「生きている穴」はこの詩集には収録されていない。

内田は、神戸市に在住し、神戸市の歌「好きな町」を作詞している。

A-12 酒井眞右「写真」

酒井眞右（まさう）は、鳥羽（2016）によって、つぎのように紹介されている。『土と鉄』（群馬・群馬勤労者集団）という特異なサークル誌について見ておこう。（中略）『人民文学』1951年11月号に代表の酒井眞右が「うわつつらをなでていた文学活動」という自己紹介文を書くまでに七号を出していた。酒井はこれまでも『人民文学』の2月号に「祖国の山河たちへ」、4月号に「ぼんせい（ん）べえ屋も唄う」、『新日本文学』の5月号に「部落冬物語」、6月号に「杵の音」という詩が掲載され、5月号では詩集『暴風警報』の紹介もされていた」

『祖国の砂』の作者紹介では、酒井眞右は、次の通りである。「群馬県高崎市 1918年11月18日生れ 満33歳 法政大学政治経済科中退。1941年宮城師範学校に入る。教員生活8年。1949年12月3日、レッド・パージで不当追放され、現在無職。詩集『暴風警報』『日本冬物語』、近刊詩集『日本部落冬物語』、『新日本文学』『人民文学』『新日本詩人』その他に詩発表。新日本文学会会員、人民文学全国編集委員、サークル誌『群馬勤労者集団』。」

掲載詩の一節である。

「なんともかとも たった三人きり
生残りはいないこの写真を。
それぞれにお互がお互の友達だった
この山あいの学校の
すみきったこれら十八人の瞳たちが
まさかいくさに殺されるとは
夢にも知らなかった
この十五人の子供たちの顔を。
ここではこんなにも可愛い丸ぼちゃ顔をしている生残り三人の顔を。」

酒井は部落解放運動の担い手であった。『百合ばっつけの青春』の作者略歴では、「1941年の暮、治安維持法違反容疑で憲兵隊に検挙される。敗戦と同時に党活動に専念。1958年党中央委員会へ脱党届を提出。以後部落解放のための実践運動・表現活動にたずさわってきた。」と書かれている。多くの著作を刊行している。

『日本部落冬物語：酒井眞右詩集』（1953年、理論社）

『十年：詩集』(1957年11月, 理論社)
『存在』(詩集, 1958年5月, 淡路書房新社)
『寒冷前線』(小説, 1959年, 理論社)
『百合ばっつけの青春：乞食首領一茶と私』(1973年, 筑摩書房)
『水の群れ』(1980年, JCA 出版)
『高崎五萬石騒動』(1980年6月, JCA 出版)
『ニホンではなくニッポンを：詩集』(1983年9月, オリジン出版センター)
『酒井眞右の十八行小説』(1989年2月, 労働教育センター)
などである。

B ベテラン

ここでは、32歳以上の11人を対象としている(小島義正の27歳は例外)。ベテランではあるが、地域リーダーに分類するほど、詩誌の編集・発行に中心的役割を果たしたとはいえないと判断したからである。しかし、いろいろな分野で活躍した興味深い人びとがいる。

B-1 千原久仁子「祭太鼓」

千原久仁子は、作者紹介では、次の通りである。「東京都 1916年12月1日生れ 35歳 尼崎市立高女卒。組合事務員。『文藝首都』『鳩』」

『文藝首都』は、1933年に創刊され、1945年11月復刊した。編集人は保高德蔵である。一時休刊したものの、1970年2月まで刊行された。北杜夫、大原富枝、芝木好子などを輩出した著名な同人誌である。『文藝首都』にも詩欄が設けられ、菊岡久利が指導していたのである。千原は菊岡の指導を受けていた。

同人であった佐江衆一「中央労働学院と文藝首都 あの頃あの人と①」『神奈川近代文学館』128号によれば、「(文藝首都では)まず会員から準同人になり、雑誌の掌編欄に作品が掲載されると同人に推挙されて本欄に書く資格を得た。毎月の合評会はきびしく、酷評された女性などは泣いていた。」

一方、『鳩』は、前述した松永浩介が編集発行した詩誌である。千原久仁子は、『祖国の砂』と『京浜の虹』の双方に詩が掲載された四人のうちの一人である。『鳩』の同人であったことから、『京浜の虹』にも掲載されることになったのであろう。山田今次の指導を受けていた。

B-2 木暮真人「渤海附近」

作者紹介は次の通りである。「東京都北多摩郡神代村(現調布市)1916年3月1日愛媛県今治市生れ 36歳 中卒。産業組合中央会(全国農業会)職員、日本農民組合中央執行委員を経て現

在新聞編集長。『コスモス』

本名は木原実である。後に日本社会党衆議院議員（1967-1981年、千葉1区選出）となる。農民運動の担い手であった。

木原には、政治家・農民運動家としてのたくさんの著書がある。『燎火の流れ：わが草わけの社会主義者たち』（1977年6月、オリジン出版センター）、『資本主義の揺らぐ日：木原実評論集』（1978年3月、オリジン出版センター）などである。

戦前、木原は17歳で上京し、岡本潤、植村諦などに迎えられ、秋山清の家に居候している。1935年に帰郷し、そこで他のメンバー同様「無政府共産党事件」によって検挙された（清水清の項（A-3）参照）。その後再び上京し、農業団体に働くようになったが、召集されたのである。

掲載詩の「渤海附近」は、満州からの復員がテーマとなっている。満州からの引揚・復員については、村岡真知子の項（D-8）で述べる。木原は、1942年から兵役で中国東北部へ送られ、陸軍の下級兵士として、ソ連との国境付近のウスリー河畔で終戦を迎えた。

「渤海附近」の一節である。

「はるかに

渤海の波がよせていた。

この暗い海のむこうに日本がある。」

一方、戦後すぐに、『コスモス』同人となり、多くの詩や文章を発表している。1次『コスモス』の中心メンバーの一人である。その後も詩を書き続け、

『漂う草：木原実詩集』（土曜美術社、1975年8月15日）

『木原実全詩集』（オリジン出版センター、1986年8月15日）

などの詩集や歌集を多く刊行している。

全詩集には、『漂う草』が収められており、掲載詩の「渤海附近」も含まれている。『漂う草』の「あとがき」では「1942年、兵隊として大陸の荒野に送りこまれたときから憑れたように詩のようなものを書きはじめ、それからの30年余り断続的に詩に親しんできた。」と書かれている。

全詩集の「あとがき」には、「敗戦の翌年に、『コスモス』創刊に名づらねた4人の同人（岡本潤、金子光晴、小野十三郎、秋山清）の存在も、私が詩を書く上で忘れることのできぬものだ。岡本と秋山は私が年少のときから、私に詩の世界があることを示してくれた人であり」「感想を書いてくれた清水清も古い友人で、お互いが18、9歳のころ、たしか岡本潤の松ノ木の家で顔をあわせて以来の仲である。清水の文章をよみながら、あらためて50年の友情の重みについて考えた。一篇の詩が理解されるプロセスにも、心を分かちあうものがどうしても必要である。」

木原実の全詩集へ、清水清は「有情な心象の風景」を寄せている。

木原実は2010年1月18日逝去された。享年93歳であった。

B-3 柴村羊五「いっぱい番茶」

作者紹介は次の通りである。「東京都 1907年5月5日生れ 44歳 早稲田大学政経学部卒。満鉄調査局を経て、現在化学工業日報社編集局勤務。」

さて、柴村も所属した満鉄調査局は、南満州鉄道株式会社の調査機能を担った組織である。満鉄成立翌年の1907年4月に創設された。満鉄調査局と称したのは、1943年5月からのことである。多くの期間、満鉄調査部であり、会社の調査機関に留まらず、満州国の調査機関として、関東軍とともに、植民地行政の重要な機能を担っていたのである。開戦直前の時期には、1939年4月に1731人だった満鉄調査部員は、1940年4月には2345人に増加していた。それだけ中途採用者も多かったのである。

調査部には、優秀な即戦力として、マルクス主義者も多く採用され、柴村もその一員であった。そして、1942年9月と1943年7月の二度にわたり、満鉄調査部員が検挙される「満鉄調査部事件」が起きている。

柴村は東京におり、検挙された対象者には入っていない。柴村は1943年7月に『日本化学工業史』を出版している。そこでは「私が化学工業調査に携わるようになったのは日満財政経済研究会在勤中で、同研究会解散後満鉄の調査機関（満鉄東亜経済調査局、在東京）に移ったが、引き続き化学工業調査を担当して前後六年になる。」と書かれている。

柴村は『高田屋嘉兵衛』において、「1944年4月大連調査局に転勤することになった。」と書いている。「私たち夫婦が幼い一人娘を伴って、引揚船に乗って荒廃の母国に戻ってきたのは、終戦から一年半後の1947年3月であった。」

1944年9月末の時点で満鉄の社員は39万8301人であり、うち日本人は13万8804人であった。戦後、中国長春鉄路会社が経営にあたり、そこでの日本人従業員は、1946年1・2月の段階で5万3263人であった。村岡真知子の項で詳しく述べるが、1946年5月から葫蘆島からの日本人の引揚げが開始され、12月からは大連からの引揚げも開始された。それまで満鉄の従業員のかなりの日本人は留用者として現場に留まり、就業を継続していたのである。

掲載詩の「いっぱい番茶」の初出は『コスモス』である。

「のみほした茶碗をしずかに机のすみにおき
ほんたての書類を机いっぱいひろげる
手ずれた統計書へのしたしみ
つかいなれたペン軸へのいとおしみ
きのうとおなじように
またおとといとおなじように
わたしはきょうの仕事にたちむかう」

「統計書」という表現が特徴的である。柴村は、引揚後、昭和電工調査部、化学工業日報社編集局に勤務し、1954年、社団法人化学経済研究所を設立し、常務理事を務めた。化学工業研究において、たくさんの業績を遺している。例えば、

『日本化学工業史』（栗田書店、1943）

『日本化学技術史』（日刊工業新聞社、1959）

『化学肥料』（有斐閣、1959）

『日本化学工業と国際競争力』（東洋経済新報社、1963）

などである。当時の化学工業研究では、第一人者である。

また、高田屋嘉兵衛についても長く研究し、『北海の豪商 高田屋嘉兵衛 日露危機を救った幕末傑物伝』（1978年初版、2000年再版、亜紀書房）を著した。（司馬遼太郎の『菜の花の沖』（初出1979年）よりも早い。）

柴村羊五は、1986年逝去された。享年79歳であった。

B-4 長沢弘泰「東京湾」

作者紹介では、「東京都板橋区 1919年12月6日生れ 32歳 岩手県盛岡市出身。明治大学法科専門部中退、同新聞高等研究科卒業。国際連合通信社勤務」となっている。

戦中の1944年3月に『青春：詩集』（東京 泉書房）を刊行している。また、詳しい紹介では「17歳で現役を志願すれど、2か月にて兵役免除のため、戦時中は召集がなかった。新聞・雑誌・出版界にて「生活の資」を得た。」と書かれている。

前述したように、『コスモス』同人である。『祖国の砂』に掲載された「東京湾」も、初出は『コスモス』である。『コスモス』休刊以降、長沢は、『日本未来派』を主たる発表の場としていた。

『日本未来派』62（1954年10月1日）に「未来」、同68（1954年12月25日）に「正午」、同69（1956年3月31日）に「終局」、同71（1956年10月20日）に「港」、金子光晴著・『水勢』について、同72（1956年11月25日）に「永久」、同73（1956年12月25日）に「未来への架け橋」、ケストナーのような作品を、同76（1957年6月25日）に「地震」などを発表している。

一方、『現代詩』6-4（1959年4月1日）の今月のベストスリーに、金子光晴によって、選ばれている。「己、または現在に就て」である。この評のなかで、金子光晴は、長沢弘泰について次のように書いている。「長沢弘泰君は、まだ詩を書いている。しかも、それが、以前の混雑した詩からみると、すじみちがたってきている。この詩もその一つで、長沢君のある進展をよみとることのできる詩だ。」「昨冬、長沢君の義兄のパパこと、秋山龍三氏に何年ぶりかで会ったとき、同君の話がでて、「あの子は、本当ならどうしようもないのだが、詩を棄てないおかげで助かっている。詩がそういう効用をもっていることをはじめて知った」と言っていた。」

B-5 瀬下良夫「母と息子たち」

作者紹介は次の通りである。「神奈川県葉山町 1914年1月3日生れ 38歳 慶応義塾大学文学部英文科卒。卒業後軍隊生活5年半。1949年から慶応義塾大学法学部助教授。『コスモス』」

1979年3月、慶応義塾大学の定年退職記念に、『教養論叢』（慶応義塾大学法学会、第51号、1979年）の論文集が出されている。そこに、「わたしの略歴」が書かれている。

瀬下は慶応義塾大学で西脇順三郎に師事し、1939年卒業し大学院に入った。その後、軍隊生活を5年半送ったのである。

「1939年5月に徴兵検査があり第一乙種であったが翌1940年3月現役兵として千葉の鉄道第一連隊に入隊した。一年半後見習士官になる。軍隊には5年6か月おり、この間に1年半ほどビルマに駐屯し、鉄道施設をねらう執拗な空襲になやまされ、これでおしまいかと思うことも何回かあった。インパール作戦開始直前にビルマから千葉へ転属になった。悪運の強い男だとよくいわれる。終戦時には門司の郊外に駐屯していたので復員が早く、これも好運というべきであろう。西脇先生に5年ぶりで御目にかかり、その御勧めで45年末頃語学研究所研究員になり、翌年予科教員に採用され、1949年法学部にうつり、今日にいたった。」

『コスモス』には、14号（1950年1月）から17号（1950年10月）まで、5編の作品を発表している。

瀬下の代表的な業績は、アラン・シリトーの『長距離ランナーの孤独』（1962年、金星堂）の翻訳である。他に、トインビーの翻訳などの業績もある。

1998年7月25日、享年84歳で逝去された。

B-6 岩田清（岩間清久）「そのひとはおあいなさらぬ」

岩田清は、作者紹介では、次の通りである。「東京都 1907年10月21日生れ 44歳 1920年小学校卒。通信生養成所卒。東京中央電信局勤務。電気通信省公務員。『中電文学』」

1947年より1948年9月まで全通東京中央電信局支部執行委員を務める。

本名の岩間清久では、結核療養所患者の詩集『風に鳴る樹々』（1952年）に、その詩が収録されている。1937年1月より1941年7月まで結核で療養していたのである。

当時、日本人の死因の一位は肺結核であった。多くの人が、肺結核に罹り、療養所に入院した。例えば、福永武彦や藤沢周平も療養所に入院していた。その中で、療養所文学が盛んになり、多くの雑誌が作られた。療養所文学については、中村（2014）に詳しい解説がある。

福永武彦は、1947年10月胸郭成形手術のため、帯広から上京し、国立療養所清瀬病院に入院し、手術を受けた。1953年ようやく退院するまで、再度の手術を受け、長期間絶対安静を続けたのである。福永武彦は1918年生れ、1952年には34歳である。国立療養所清瀬病院には、後述する落合みどりも入院し、そこで亡くなった。

藤沢周平は、山形県鶴岡から上京し、1953年東京都北多摩郡東村山町の篠田病院・林間荘に入

院し、手術も受けている。藤沢周平は1927年生れ、1952年に25歳である。入院早々に療養仲間の提唱で俳句同好会が作られ参加した。そして、静岡の俳誌「海坂」へ投句を始めるのである。1955年、病院内に詩の会「波紋」が作られ、結成同人に加わった。1957年11月、30歳のときに退院し、業界新聞社に就職するのである。まさに、療養所文学が、藤沢周平を文学に開眼させたのである。

他にも、本詩集の詩人たち、落合みどり（M-1）、清水清（A-3）、吉田美千雄（A-5）、谷川雁（K-4）なども療養生活を送っていた。

B-7 合田曠「陥没」

合田曠の作者紹介は次の通りである。「徳島県池田町（現三好市）1919年2月7日徳島県生れ 33歳 立命館夜間中学中退。印判業。『蘇鉄』」

ビルマより復員後、『四国文学』『詩脈』『蘇鉄』等に拠る。新作家協会会員。1951年、詩集『黒い穹窿』（四国文学社）を刊行している。『祖国の砂』掲載の「陥没」は、ビルマでの兵役に基づいて書かれたのではないだろうか。

「A

おい

この八糎口径の砲腔をのぞけばざらざらざらの螺旋眩暈

おれはいったい誰を殺そうとするのか

いっばいにふさがっているあの八糎青雲 光の充満

轟然 一発放てばいっしゅん碧落はくだけ

あそこから血ぬれて落下する」

1982年に3冊の詩集を出している。『断層 詩集』（1982年3月、詩脈社）、『Good Night 合田曠詩集』（1982年5月、異邦人社）、『合田曠詩集 日本現代詩人叢書』（1982年11月、芸風書院）である。

さらに、『ノートに羽根のような詩があった 詩集』（1984年10月、詩脈社）を刊行している。

2003-2004年には4冊の詩集を出している。『雪の降る夜に〔第一〕詩集 合田曠詩集 A』（2003年10月、異邦人社）、『幻の犬〔第二〕詩集 合田曠詩集 A』（2003年10月、異邦人社）、『鬼女呪文〔第三〕詩集 合田曠詩集 B』（2004年2月、異邦人社）、『天の鏡〔第四〕詩集 合田曠詩集 B』（2004年2月、異邦人社）である。

B-8 大木静雄「茶話三つ」

大木静雄の作者紹介は次の通りである。「千葉県八街町（現八街市）1919年8月1日生れ 32

歳 中卒。日本新聞協会新聞学院中退。京成電鉄電灯部、海軍水路部、新聞記者、土工、航空機・船舶の設計、1944年3月京成電鉄株式会社自動車部等々を経る。1947年以来、京成電鉄労働組合副委員長、渉外部長、教宣部長、自動車支部長、千葉県労働組合同議副議長。1950年10月レッド・パージにより退社。現在写真材料商。『アフランシ』

掲載詩は、解雇され、かつぎやを始めたことを詠んでいる。多くの家庭ではかつぎやの持ち込むヤミ米にたよっていたのである。ヤミ米ルートが確立し、警察の目をごまかしていかに運び込むかがかつぎやの手腕であった。一人一人が運び屋となって、ヤミ米を都会に運び込んでいた。

「いちにち二三〇円の失業保険ではどうにもならない ワイフは子供をおぶってカツギや—自分のものは このもうけで買う という

ばくもセコの本ストンバッグを買って いっそうの冬装束で米搬びの店びらき当日 いっせい があつた 悠然としていたら ばくだけは訊問もされなかった

人品骨柄卑しからず 服装はたいせつな道具だということ」

『アフランシ』は、大沢正道編集発行（1号のみ松尾邦之助）のアナキズム系の雑誌で、1951年4月から1957年12月の36号まで刊行された。「アフランシとはフランス語の解放された奴隷のことである」と書かれている。『戦後アナキズム運動資料 7巻 アフランシ（自由クラブ、アフランシ社）全36冊』として緑蔭書房より復刻版（1988）が出されている。

この中で、大木静雄は詩や文章を発表したり、消息欄に登場する。最初は1951年8月の消息で、「大木静雄君、レッド・パージのあふりで失業の憂目に会った同君は、目下自宅で駄菓子屋を開業。」となっている。

9号（1952年1月）に「借りた本の読後に」、18号（1953年10月）に「詩 あせ」、28号（1955年9月）に「あわれなりわがねがい—職業遍歴の小休止に—」、30号（1955年12月）に「ばくの欲望すること」、31号（1956年2月）に「詩 途上」、32号（1956年9月）に「スチルネル初見のことなぞ」を書いている。

B-9 久保文子（久保花枝）「夜」

久保文子の作者紹介は次の通りである。「岡山市 1915年1月15日生れ 37歳 岡山県福渡高等女学校卒。主婦。『新日本文学』『くるまざ』」

『くるまざ詩集』は、1950年9月、「裸電球の下での会」（編集発行者久保文子）より発行された（中村（2014））。「くるまざ」には、当時の新日本文学会中央委員の吉塚勤治も参加していた。「裸電球の下で」は吉塚の詩である。

久保文子には『新日本文学』1951年8月号に「防火水槽を売った内儀さん」の一文がある。8月15日を巡る変化について書かれている。

B-10 北村篤「外套の詩」

作者紹介は次の通りである。「津島市 1919 年 11 月 28 日生れ 32 歳 独学。新聞記者。『三重詩人』同人」もう少し詳しくは「1946 年三重県津市に於いて詩雑誌『詩祭』を起し、その同人となる。後『名古屋文学』同人となり、創作および詩数篇を発表す。」となっている。

B-11 小島義正「裏町」

作者紹介は次の通りである。「栃木県上都賀郡栗野町 1925 年 4 月 17 日生れ 27 歳 県立栃木中学校卒。植民地官吏、機械検査工、労組書記を経て関配に入社。1950 年 8 月職場を追われる。現在無職。『とちぎ詩人』」

編集責任者を務める「とちぎ詩人」はとちぎ詩の会（栗野町、現鹿沼市）によって、1951 年に第 1 号が刊行された。

C 農民

ここでは、北本哲三、高田正七、長沼静人の 3 人を対象としている。他に錦米次郎、矢山みつも農民である。また、押切順三は、農業協同組合の職員であった。押切とともに『処女地帯』を支えた北本哲三は、ここでは農民に含めたが地域リーダーと言ってもよい存在である。

C-1 北本哲三「稲熟病田」「暖冬」

作者紹介では、次の通りである。「秋田県南秋田郡大平村（現秋田市）1913 年 1 月 9 日生れ 39 歳 高小卒。農業に従事。『処女地帯』」

さらに「小学校卒業と同時に家業たる農業に従事現在に至る。20 歳の頃より詩を書き始め、主として地方同人誌に作品を発表。戦争中は政治運動にも参加したが、終戦後は鳴かず飛ばず。作物と共に生活しながら感至れば詩筆をとる。現在押切順三らと結び詩誌『処女地帯』を刊行す。」と書かれている。戦中の政治活動では拘留もされている。

なお、本名は鎌田喜右衛門である。1995 年 7 月 5 日逝去された。享年 82 歳であった。秋田市議会議員にもなり、1971 年-1975 年に市議会副議長、1975 年-1979 年に市議会議長を務めている。

また、北本哲三（鎌田喜右衛門）は 1983 年秋田市文化章を受賞している。そこでは、「鎌田さんは、自営農のかたわら半世紀にわたり、農民詩を書き続けてきました。昭和 8（1933）年『処女地帯』の結成に参画して以来、時代の激動にもまれながらも今日まで編集発行を続け、戦前戦後を通じて本県における詩活動の中心的役割を担ってきました。県内詩人界の長老としてその先駆的な活動は後進の指標となっています。」と紹介されている。

北本哲三は、1948 年『再び生命の火が』を刊行している（1996 年に復刻版、秋田草園書房）。

『処女地帯』は、1950 年にふたたび創刊となっている。北方自由詩人集団発行で、押切順三と北

本哲三が代表となっている。

『新日本文学』1952年3月号に掲載詩の「稲熟病田」を発表している。初出は『処女地帯』9号で、『祖国の砂』に手直しをして掲載された。

また、北本哲三編で1953年『北方の種子 秋田農民詩集』を北方自由詩人集団処女地帯編集部から刊行している。

1955年7月30日に、伊藤永之介編『農民詩集』が刊行されているが、この中で北本哲三は最も多くの詩が掲載されている。「冷たい風がやみそうもなく」「健康なやつだけを」「風かおる五月というが」「正月」「暖冬」「県道土崎岩見三内線」である。作物の生育に関する詩が多い。さらに巻末に「『農民詩集』刊行について」を秋田県農民詩集刊行委員会として書いている。掲載詩の「暖冬」は、ここに再掲されている。

「馬糞につまれた堆肥の山が
湯気だつほど
東南の風があたたかい大寒の日の午後」

また、『現代詩』2-8(1955年8月1日)に「旅行の日に」を発表している。『コスモス』の同人でもあった。19号(1957年9月)に「点々と白く」を発表している。1978年には『詩集 健康なやつだけを』(たいまつ社)を刊行している。この詩集によって、1979年第4回秋田県芸術選奨を受賞している。

さらに、押切順三等とともに、1979年『雪国の詩 土に生きる仲間たち』(秋田文化出版社)を刊行している。

C-2 高田正七「生活者」

高田正七は、作者紹介では、次の通りである。「島根県簸川郡久木村(現出雲市)1913年5月20日生れ 38歳 農業に従事」1977年64歳で逝去された。

州浜昌三が「斐川の農民詩人 高田正七」という詳しい伝記をStagebox2011年7月23日にアップしている。(在住地の簸川郡久木村はいったん斐川町となった。現在は出雲市となっている。)この伝記は『山陰中央新報』の「人物しまね文学館」に掲載されたもの(2011年)の元の原稿である。

それによれば、満州へ出征し、1947年5月に復員した。その後、村野四郎が選者の『文学集団』、『若草』、『詩洋』、秋山清の『コスモス』などに詩が掲載された。1952年に村野四郎の推薦で北川冬彦の『時間』の同人となった。

『コスモス』19号(1957年9月)には「砂漠の駱駝」を発表している。

『詩集 風土記 上巻・中巻・下巻』を刊行している。上巻1971年(農民文学賞1971年度第15

回候補），中巻 1973 年（農民文学賞 1973 年度第 17 回候補），下巻 1976 年である。

また、高田正七には上記詩集 3 冊，個人詩誌『二十五年』（1964 年から 1975 年，151 号まで毎月発行，農民文学賞 1974 年度第 18 回候補，1975 年度第 19 回候補），『島根年刊詩集』（島根県詩人連合）10 集（1965-1970，1972-1975 年）の発行などの業績がある。詩集と『二十五年』で，計 4 回も農民文学賞候補となっている。

C-3 長沼静人「記憶について」

長沼静人は，1919 年 2 月 2 日生れの 33 歳である。旧制中学校卒で，長野県下伊那郡上久堅村（現飯田市）に在住している。戦時中は，千島で従軍し，1944 年末ころ，帰還している。『祖国の砂』に掲載された「記憶について」も千島での従軍に基づいていると考えられる。帰還の後は，農業に従事し続けている。関係するグループ，詩誌等は書かれていない。また，伊東静雄と書簡のやりとりがあったようだ。

掲載詩の「記憶について」の一節である。

「あれは海。ベーリング海の手霧だ。気流だ。

あれは醜悪な皺のある水平線。

おれたちの喘ぎや憎悪を舐めるつめたい魚族の群だ。

あれは発光する真空管。―― 花卉だ。火口原だ。

あれは」

長沼静人は，多くの詩集を発表している。まず，1951 年 11 月の『詩集 外景』（麓書房），1952 年 12 月の『覚書・脱出のために：長沼静人詩集』（西沢書店）である。『詩集 外景』は，安東次男によって，書評が『詩学』1952 年 2 月号に発表されている。

さらに，『日本未来派』66（1955 年 7 月 25 日）に「受信者」を発表し，73（1956 年 12 月 25 日）に「未来への架け橋」を発表し，86（1959 年 2 月 25 日）に「曲り角」，87（1959 年 4 月 25 日）に「そしてどうする」を発表している。

そして，1968 年 9 月の『もうひとつの神話：1948-1968：詩集』（白土社），1973 年 7 月の『長い廊下』，1975 年 7 月の『帰心をめぐる風と唄（続・五十代の土 1968-1973）』を刊行している。さらに 1987 年には詩集『海は山は』（耕人社），1987 年の『おいでよ じいちゃん 全長沼静人詩集』を刊行している。他にも，川柳集，句集，歌集なども発表している。

D 女性

ここでは，次の 8 人の女性を対象としている。池田藤子は 32 歳だが，ベテラングループではな

く、こちらに含めた。

D-1 榊井袖子「からすうり」

作者紹介は次の通りである。「千葉県市川市 1930年6月16日生れ 21歳」。

この当時の女性の多くは、働いていた。農業や小売業・サービス業、町工場などの自営業の比率(56.5%, 1956年)が高く、そこでは家族を挙げて労働することは当然であった。その頃の日本の女性の労働力率は、アメリカ・ヨーロッパなどよりも高かったのである。言い換えれば、アメリカ・ヨーロッパのほうが、専業主婦が多かったのである。当時の日本は貧しく、多くの女性も働かなければならない状況であった。日本でいわゆるM字型カーブが顕著に現れてくるのは、1970年代以降のことである。高度経済成長の時期を経て、豊かになり、はじめて「専業主婦」が増えてくるのである。

1950年代には、自営業以外でも、女性は働いていた。その働き方の一つが、榊井の描いた内職という働き方である。

「あかむらさきにふくれた手で
内職の箱はりばかりしているベンちゃん

ちゃぶ台一杯の箱 箱 箱

“それだけやればいくらなの”
“六円と五十銭”
鼻の頭がジーンと痛かった――」

D-2 池田藤子「その足音」

池田藤子の作者紹介は次の通りである。「浦和市 1919年7月26日生れ 32歳 高女高等科卒。22歳にて結婚、家庭主婦。二児あり。『民芸通信』」

『新日本文学』1952年10月号に「病院にて」が掲載されている。『民芸通信』15号よりの転載である。

D-3 武内笛美「額」

武内笛美は、大島博光の主宰した詩誌『角笛』1号(1950年9月1日)に、「風につげる歌」を發表している。同号には、谷川雁も「夜明けのひと」を發表している。

作者紹介では、1931年10月28日生れの20歳で、埼玉県秩父郡高篠村(現秩父市)在住である。都立女子商業卒で、参加している詩のサークルは『民芸通信』会員、『詩と詩人(新潟)』同

人、『宇宙船（埼玉）』同人である。

民芸通信は、埼玉県与野市の新日本文学会与野支部のサークルであり、発行人光本稔、民芸通信の会発行である。他に、池田藤子、つざか・もとい、波多野郁夫、多喜馨、日向野英一、花岡信吾、田一夫、海原暁太郎、斎藤清などが会員である。

D-4 川口しげ子「なぎなたほおずき」

川口しげ子の作者紹介は次の通りである。「横浜市 1925 年 8 月 19 日生れ 26 歳 横浜第一高女卒。主婦。」

病に臥す詩である。

「白いシーツにみだれた髪をさらして
血の気のない唇でならすほおずき
病みつかれて二月
看られるだけ看られている私に
母がおもいついたなぐさめのなぎなたほおずき」

D-5 細川洋子「童説」

細川洋子の作者紹介は次の通りである。「神奈川県逗子町（現逗子市）1926 年 3 月 21 日生れ 26 歳 1948 年、津田英学塾卒。東洋高圧工業勤務、1952 年 5 月、結婚のため退職。『世代（埼玉）』」

D-6 樋口昭子「壁」

作者紹介は次の通りである。「金沢市 1928 年 10 月 9 日生れ 23 歳 高女卒。北陸新聞社勤務（文化・婦人関係）。『驢馬』『石川詩人』『石川詩人』は、石川詩人協会によって、1952 年刊行された。

さらに「1945 年より、『北の人』『雑草原』『復刊北の人』『北国文化』に作品発表。1951 年 10 月同人誌『驢馬』に入会。『石川詩人』会員」と書かれている。

樋口昭子は、『北国文化』誌では、「夜明け前」（小説、52 号（1950 年 4 月 30 日））、「萩の門」（小説、71 号（1951 年 11 月 30 日））を発表している。

D-7 近江てるえ「イボ」

作者紹介は次の通りである。「東京都 1926 年 1 月 2 日生れ 26 歳 日本女子大学国文学部卒。会社事務員」

『現代詩』2-8（1955 年 8 月 1 日）に「二つの砂漠」を発表している。

4 次『コスモス』に参加し、秋山清を支えた。

D-8 村岡真知子「たき火」

作者紹介は次の通りである。「山口県豊浦郡小串町（現下関市）1925年9月17日生れ 26歳山口県立深川高等女学校卒。1945年8月終戦直前チャムスを引揚、1946年10月満州・長春より引揚、博多上陸、1947年2月より4年間漁網工場に働き、1951年夏退職、現在国立山口病院職員として勤務。『萩文学』」

『萩文学』は、新日本文学会萩支部より、1952年2月の第5号まで刊行されている。

満州からの引揚については、数多くの体験談が刊行されている。村岡のいたチャムス（佳木斯）は現黒龍江省の中でも、ロシア沿海州に近い。そこから長春までは大変な距離である。村岡真知子は、終戦直前チャムスから長春（当時新京）へ移動し、そこで1946年10月まで1年有余を過ごした。博多上陸となっているが、おそらく葫蘆島経由である。

その長春からの引揚げについて、ここでは前田忠廣『国の大義の名のもとに』を参考にした。前田は、長春で両親が病死した中学生で、弟や叔父などと引揚げた。前田は、「自分たちは棄民されたのだ」と言っている。

「船艙は二層になっており床の鉄板には毛布が敷いてあった。ブリッジの後の大きい方の船艙にわれわれ長春日僑俘第58遣送団第115大隊の千人ほどが収容された。“日僑俘”の文字は、日本人捕虜、俘囚というような侮蔑の意味がこめられていた。大隊長の下に指揮班がおかれ、私は指揮班の伝令に任命されたが、長春出発から佐世保上陸までなんにもすることがなかった。」

「左舷デッキは大きな鉄釜をいくつも置いて烹炊所とした。烹炊所で作られる三度の食事は、主食は赤い色をした高粱飯、味噌汁は粉末味噌を使っていた。おかずは梅干、佃煮、漬物のどれかときまっていた。」

「敗戦直後から関東軍将兵をふくめ（中国東北部と朝鮮北部の）200万人が杳として行方知れずになっていた。（引揚の）すべてが占領軍まかせだった。満州からの引揚は1946年春になってからの米中協議で実現の運びとなり、ソ連はこのころになってようやく関東軍の捕虜をシベリアへ連行したことを認めている。旧満州地区からの引揚第一船Q58号（LST）が佐世保に入港したのは1946年5月11日、シベリアからの帰国第一船が舞鶴に入ったのは12月8日だった。」

満州には日本人160万人がおり、うち20万人が帰国できなかった。シベリアに連れ去られたのは60万人といわれている。シベリアでの死者は5万人とも20万人とも考えられている。

「1946年9月23日の早朝、少年（前田）は身じろぎもせず英彦丸の甲板に立ちつくしてゐた。佐世保港に向ふ引揚船の前方には、九十九の島々の濃くうるほつた緑がひとつふたつと優しい姿をあらはにしてくる」

同様に、木暮真人、高田正七は満州から復員し、矢山みつ、柴村羊五、山崎正和は満州から引揚げている。

E 学生

当時、学生だったのは、蛭間裕人、雨宮杉夫、草階俊雄、山崎正和、安藤美紀夫、滝川貞夫の6人である。

E-1 雨宮杉夫「キリストの下働き」

雨宮杉夫の作者紹介は次の通りである。「東京都 1931年3月29日生れ 21歳 台湾高雄市より引揚。現在官庁勤務の傍ら早稲田大学第二文学部仏文科在学。『新日本文学』」

その当時は、雨宮のように、働きながら夜間部に通う学生も多かった。

「キリストの下働き」は『新日本文学』1952年6月号にも掲載されている。同誌では詩集『手と足』よりとある。前述したように、『祖国の砂』に掲載する詩が決まったのが、1952年5月であるから、雨宮の詩は、その後に『新日本文学』にも掲載されることになったようである。

さらに『新日本文学』1952年12月号に「軍艦マーチ」を発表している。また、『現代詩』2-9（1955年9月1日）に、「日本文化国・文化人（六）」を発表している。

E-2 山崎正和「プラトーク」

作者紹介は次の通りである。「京都市 1934年3月26日生れ 18歳 京都に生れ、1939年より中国に在住。戦後引揚。京都府立鴨沂高校卒業。1950年京都詩文学作家集団を創立。京都大学文学部一回生。京大文学サークル員。詩集『平和のうたごえ』『人民文学』等に作品発表。『人民文学』その他サークル誌。」

2017年3月に『舞台をまわす、舞台がまわる 山崎正和オーラルヒストリー』が出版された。幅広い活躍をした人だが、本稿では、これに依拠して『祖国の砂』前後の事情だけを取り上げた。年譜には「プラトーク」が『祖国の砂』に掲載されたことが明記されている。初出は京都詩文学作家集団機関誌『サモワール』第1号（1951年）である。ここには後述する安藤美紀夫も参加していた。山崎は、1950年16歳で参加している。

『祖国の砂』最年少の山崎正和は、戦中満州奉天（現瀋陽）に居住していた。1939年一家で奉天に行き、一時帰国もあったが、奉天第一中学に入学した（1946年）。1948年1月に満州医科大学教授であった父親が、その後留用されていた満州で逝去した。残された母と長兄の山崎はじめ兄弟3人で、引揚げたのである。満州からの引揚については、村岡真知子の項で述べたが、山崎正和の家族の場合はこうであった。ソ連の占領、八路軍の進軍、国民党軍の進軍などの厳しい時期を経て、1948年4、5月に、辛うじて医科大学関係者は米軍の輸送機で瀋陽を脱出し、北京を経て、塘沽の港から佐世保へと向かったのである。その後京都に住む。

山崎正和は、鴨沂高校時代に共産党細胞を結成している。「（鴨沂細胞は）断固、所感派だった。」
「私たち鴨沂細胞は『人民文学』のほうにつきました。なぜなら、そのほうがダサくて、面白くな

くて、しんどいからです。」「(1951年10月の五全協で)所感派は山村工作隊を組織し始めました。これは本当にナンセンスだった。」「私自身は大学に入る少し前から、共産党あるいは左翼についてまったく諦めたというか、幻滅しきっていました。」「この頃から先は、私は義理で共産党だった。」そして、1955年7月の六全協もあって、「私はさっさと辞めました。」「関心はアカデミズムに集中しました。」

その後、大学院へ進み、アメリカへの留学を経て、劇作家および大学教員として、幅広い活躍をしていく。

E-3 滝川貞夫「北の海」

作者紹介は次の通りである。「和歌山県東牟婁郡宇久井村(実家、現那智勝浦町)1932年7月8日生れ 19歳 北海道大学農学部林学科2年生。『紀南文学』『新日本文学』」さらに「新宮高校在学中中文芸部に在籍、詩をつくる。1949年宇久井文学サークル誌『息吹』で活動。1951年紀南文学に作品を発表す。」と書かれている。

『新日本文学』1951年10月号に、「哀しい季節」を発表している。初出は、『紀南文学』3号である。

滝川は、北海道大学に残り、理系の研究者の道を歩む。1961年から25年間、北大天塩地方演習林に勤め、北方森林の取り扱い方法の研究を行った。後に北海道大学農学部附属演習林長教授となる。実は、北大演習林は、ほとんど道内にあるが、一か所だけ本州にある。それが、滝川の実家の近くの和歌山県東牟婁郡である。

『日本林学会誌』1957年3月に「微量要素がカラマツ種苗の生育に及ぼす影響」、『日本科学教育学会研究会研究報告』1993年2月に「森林に学ぶ：緑の環境における生涯教育」など、多くの論文を発表している。

1996年3月、『燃える海流：青春詩集』を刊行している。この年、滝川は演習林長教授で北大を退官している。この詩集は、「燃える海流」「哀しい季節」「麦笛の唄」の三部構成となっている。北大学生時代の詩は、「哀しい季節」である。掲載詩の「北の海」は、『祖国の砂』に掲載されたことが明記されている。「哀しい季節」は前掲の『新日本文学』に掲載された詩である。

E-4 安藤美紀夫「ぼくらは平和投票に参加した」

作者紹介は次の通りである。「京都市 1930年1月12日生れ 22歳 京都大学文学部在学中。『コスモス』」「ぼくらは平和投票に参加した」は『コスモス』初出である。

安藤美紀夫は、著名な児童文学者である。1990年3月17日、享年60歳で逝去された。『日本児童文学』1990年9月号は「安藤美紀夫追悼 特集」号である。その中に、長男安藤直樹による「安藤美紀夫略年譜」が書かれている。そこから主要と考えられる箇所だけ引用する。

1944年 14歳 愛知県半田市の中島航空に勤労働員。敗戦まで海軍の偵察機「彩雲」の主翼づ

くりをする。

1945 年 15 歳 敗戦により、京都に帰り、京都府立第三中学校の中学生活にもどる。

1947 年 17 歳 中学卒業後、古本屋をやったりした後、小学校の教員となる。

1950 年 20 歳 京都大学文学部に入学。京都詩文学作家集団に所属。詩誌『コスモス』同人となる。

1952 年 22 歳 イタリア文学科にすすむ。同級に小松左京など。

1954 年 24 歳 京都大学イタリア文学科卒業。北海道津別高校に英語教師として赴任。（その後北見北斗高校へ転勤）

1955 年 25 歳 手刷りの個人研究誌「現代イタリア児童文学研究資料」を発刊（1962 年まで 67 号）。東京における鳥越、古田、神宮らの「小さい仲間」に寄稿するようになる。

1956 年 26 歳 日本児童文学者協会に入会。

1973 年 43 歳 日本女子大学家政学部児童学科助教授となる（その後教授）。第 3 回赤い鳥文学賞を「でんでんむしの競馬」で受賞。

著書は、創作では『白いりす』（1961 年、講談社）、『ジャングル・ジムがしずんだ』（1964 年、講談社）、『ポイヤウンベ物語』（1966 年、福音館書店）など多数ある。また、評論も『世界児童文学ノート 1-3』（1975-77 年、偕成社）など多数ある。さらに、翻訳もサルガーリ『黒い海賊』（1958 年、講談社）、カルロ・コッローディ『ピノッキオ』（1963 年、講談社）、アミーチス『クオレ』（1963 年、講談社）など多数ある。

E-5 蛭間裕人「品川風景」

作者紹介は次の通りである。「東京都 1931 年 6 月 5 日生れ 21 歳 東京学芸大学学生。くるみ会『うしお』『みちしるべ』」

さらには「詩と文学と美術——芸術の徒としての第一歩をふみだしたばかりです。学生であることとアルバイトであること。」と書かれている。『祖国の砂』掲載の経緯は前述した。

蛭間裕人は、『新日本文学』1953 年 12 月号に、「“工事場”抄 死」を発表している。その後、東京学芸大学を卒業して小学校の教員となる。

そして、定年退職後、新日本文学会の活動に復帰した。また、『〈記録〉『テアトロ』と染谷格と小説「遠い壁」のための素描と覚え書き』（2000 年 6 月、くるみ書房）を刊行する。蛭間裕人の本名・旧姓は染谷洋であり、父・染谷格（ただし）の伝記と自らの成長の記録を綴ったものである。初出は、活動家集団思想運動の雑誌『社会評論』に、1979 年 10 月から 1981 年 12 月まで、13 回にわたって連載したものである。

父・染谷格（1903-1951 年）は、戦前のプロレタリア演劇活動を担った人物で、特に雑誌『テアトロ』の編集発行人として知られている。村山知義、滝沢修、久保栄、千田是也などと一緒に治

安維持法違反で逮捕され、数年拘留され、転向して出所した。その父に関して、こう述べる。

「父には観念的な理想はあったが、実「生活」に対する身構えができていなかった。」また「父は「革命家」までは行っていない「活動家」だったのでしょうが、それでも我が家へ与えた負荷は大きかったのです。」と書いている。戦後父は『テアトロ』を再刊した。しかし、1948年には「母が疎開の荷物に加えておいた茶箱の、和服が一枚一枚消えていった。新倉の農家でさつま芋と交換され、池袋のキンカ堂で現金に換えられた。たった一つ残った資産は盛岡の家であった。」さらに「盛岡の家を売る決心をした。」という状況に追い込まれていったのである。亡くなるまで、父には収入はほとんど無かった。

1949年、「父が咲かせた最後の花は、北海道旅行であった。それは党の教宣活動としての行脚であった。」各地を回っているが、日記によれば「8月10日釧路発。雄別炭山に着く。文化部長荒さんに案内されてクラブへ。昼食後文学サークルの集まりに出席。新日本文学会、雄別友の会をつくる件その他。きょうがその第一歩だった。」となっている。(雄別炭礦については、かさい・まさるの項(J-5)参照)

「革命家」「活動家」の子供たち、すなわち「多くの第二世代は、理想を高く掲げて突き進む革命家、理想の焰を燃やし続ける活動家であるよりも生活者であることを選んだ。会社勤め、学校勤め、自営業……。私もまた小学校教師という職業を持つ。」

「と同時に、新日本文学会や地団研(地学団体研究会)の末席を穢し何らかの革新的文化運動の最末端を担って来た。労働組合の中でも与えられた任務は拒むことはなかった。」

「しかし、やはり危い橋は渡らず職場に根を下した生活者で、私はあり続けた。」

なお、蛭間は『新日本文学』1987年2/3月号に「平 平凡〈上糸の部〉」(小説)、同2000年11月号に「プロレタリア文学→民主主義文学→そして」、同2002年10月号に「替え玉と教授」(短編小説)、同2004年7月号に「会員二世一個人史の中の新日本文学会」を発表するなど、定年退職後に多くの文章を書いている。

E-6 草階俊雄「しんきろう」

草階俊雄の作者紹介では、次の通りである。「秋田県南秋田郡上井河村(現井川町)1925年9月23日生れ 26歳 中学校助教を経て現在明治大学文学部史学科4年生在学。『相模文学』」

秋田の押切・北本等の『処女地帯』にも参加していた。秋田中学卒業後、東京高等農林学校中退。秋田県上井河村上井河農業会書記となる。陸軍二等兵で帰休除隊。上井河中学校助教ののち明治大学へ進学している。

その後『現代詩』7-11(1960年11月1日)の「今月のベストスリー」で秋山清によって選ばれている。「青年誕生」という詩である。『処女地帯』に掲載されたものである。

また、草階俊雄は、1970年刊行の大沢正道・内村剛介編『われらの内なる反国家』(太平出版会)に、「農村から出た一文学グループのこと」を執筆している。ここでは、「明治大学文学部を卒業

して高校教師となる。現在は、北海道・東北の仲間と『リベルテ』を出している。」と紹介されている。

「農村から出た一文学グループのこと」は、次の内容である。「わたしたちの詩グループの特色は、二、三男と女が集まっていたということです。わたしたちの胸の底には、やがて村を出てちりじりばらばらになるのが自分たちにとってはあたりまえ、という思いがありました。」「詩をつくることは友をつくることでした。」1948年ころ、やかましくいわれたサークルについて、「一方で、サークルといわれるほどのものではないという卑下の気持ちからでもありましたが、他方では、自分たちをサークルとは異質のものと実感していたようです。」この感覚は重要であろう。サークルとは何か、自分たちもやっているが、それはサークルとは異質である、という感覚である。「サークル活動は、ひときわスケールの大きなあつまりとの直接・間接のむすびつきを含みとしていて、メンバーの組織化に重点がかかっているような気がしたのです。」「人の集まりに束縛ごとがあるのはあたりまえですが、それが強く、メンバーの活動様式やめざす価値を規制して、賛同者の数量的増加にかかわっている状況では、詩がそだちにくいと思います。」

さらに、草階俊雄は1971年『黒の手帖』11号に「土着の原理」を書いている。

一方、秋田では、1971年11月に、『イタリアの空』を秋田文化出版社の秋田詩人選として刊行している。1985年『泡の建築家 草階俊雄詩集』をARS詩人クラブ（秋田）から刊行している。1991年『私の三色旗』をARS CLUB（秋田）から刊行している。1999年『詩集 抽象の薔薇』をARS CLUB（秋田）から刊行している。『ARS』は、草階俊雄が発行していた詩誌である。